

「行為の論理構造を解明する」歴史授業の教育内容開発

— 「アメリカ外交」の場合—

森 才 三

社会科は「市民的資質の育成」にどこまで関わるのかという問題に対して、事実認識の領域に限定されるべきであるとする立場がある。そうした立場に立つ社会科の一つとして、私たちが生きている「今-ここ」を読み解くための枠組みとしての構造 — 人間の行為の場あるいは行為の集積としての社会の構造と、なされた行為そのものの論理構造 — の解明をめざすものがある。本小論では、そのうちの「行為の論理構造を解明する」授業のあり方について論じ、「アメリカの外交」を具体的なテーマとした教育内容を開発し、教授書の形式で提示する。

I はじめに

周知のように、社会科教育には「社会認識の形成」と「市民的資質の育成」という二大目標がある。しかし、その二つの関係をどのように捉えるか¹⁾ということについては、未だ共通理解は成立しておらず、これまで様々な社会科授業論が主張されてきた。社会科の目標に関する目下の議論は、二大目標を「あれか、これか」式に捉えるのではなく、社会科は「市民的資質の育成」にどこまで関わるのか、という社会科の守備範囲をめぐる、展開されている²⁾。

そうした社会科の守備範囲をめぐる議論をふまえて、社会科の守備範囲を市民的資質の構造に対応させて捉えれば、社会科は以下の3つに分類することができる。

- (1) 事実認識の領域に限定しようとするもの
- (2) 価値認識の領域にまで広げようとするもの
- (3) 市民活動をも射程に入れようとするもの

本小論はこのうちの(1)の立場に立つものである³⁾。

(1)の社会科も、学習内容となる知識のレベルやその具体的な内容によって様々であるが、(1)の社会科では、説明力が大きく転移可能な概念的・説明的知識を科学的な探求の道筋にしたがって習得させることに、教育的な意義があるとされている。本小論では、そうした社会科のバリエーションの一つとして「行為の論理構造を解明する」場合について、「アメリカ外交」をテーマとして取り上げ、高等学校『世界史』の教育内容を開発し、教授書の形式で提示する。

実践に際しては、『世界史A』や『世界史B』の最終単元「これからの世界と日本」での実践が一般的であろうが、近現代史の単元において投げ込み教材として実施することも可能である⁴⁾。

II 「行為の論理構造」を解明する歴史授業

(1) 歴史学習の意義と社会科の学習対象

社会科の守備範囲を事実認識の領域に限定しようとするのは、子どもの自主的自立的思想形成を保障するためであり、そうした社会科における歴史学習には、次の2つの意義があるとされている⁵⁾。

A. 起源と来歴を知ることによる現代社会の理解

B. 過去の社会の理解を通しての現代社会の理解

「現代社会の理解」、つまり、私たちが生きている「今-ここ」を読み解くということに、意義を認めているわけである。そのためには、「今-ここ」を読み解く「枠組み」が必要である。「枠組み」とは、説明力が大きく転移可能な概念的・説明的知識であり、事実認識の領域に限定しようとする社会科の歴史学習では、そうした「枠組み」としての知識の習得がめざされる。

そうした「枠組み」としての知識は、社会科の学習内容であると同時に、学習対象でもある。社会科が学習対象とするものは、いうまでもなく、「社会事象」であるが、「社会事象」とは、「社会における人間の行為」であり、「人間は、社会という場において、それを外的条件としつつ、内的な意思決定の論理にしたがって決断しながら行為し、社会を構築していく」と説明することができる。とすると、学習対象としての「社会事象」は、次の2つのことに集約される。

(i) 行為の場であり、行為の集積でもある社会

(ii) 行為を決断させた意思決定の論理⁶⁾

したがって、様々な社会事象が生起・消滅する現代社会を読み解く「枠組み」とは、a「社会の構造」とb「行為の論理構造」ということになる。つまり、A・Bをめざす社会科歴史授業は、a・bを分析・解明する授業で

あるということになる。以上、社会科歴史学習の2つの意義(A・B)と、社会科の2つ学習対象(a・b)とから、「子どもの自主的自立的思想形成を援助する」社会科歴史授業のバリエーションとして、次表の①～④が考えられる。

【表1】社会の構造と行為の論理構造を解明する歴史授業の類型

	A	B
a	①社会の構造の展開を通時的に解明する。	②過去の社会の構造を解明する。
b	③行為の論理構造の展開を通時的に解明する。	④過去の行為の論理構造を解明する。

本小論では、現代社会を読み解く「枠組み」としての「行為の論理構造」を解明する2つの授業(③・④)のうち、③「行為の論理構造の展開を通時的に解明する」歴史授業の教育内容開発を試みる。

(2)「行為の論理構造」の解明

行為の説明についての独自の論理構造を解明したウリクト⁷⁾は、説明を因果的説明と目的論的説明の2つのタイプに分けているが、「社会の構造」と「行為の論理構造」とを解明して説明する場合、前者は因果的説明となり、後者は目的論的説明となる。ウリクトによれば、目的論的説明は、実践的推論(実践的三段論法)を逆にたどるものにほかならないという。したがって、「行為の論理構造を解明する」ということは、実践的推論を逆にたどりながら分析するということになる。例えば、本小論では、アメリカの「外交」という行為を取り上げるが、アメリカ「外交」としてイラク戦争を事例にすると、その実践的推論の組み立ては次のようになる。

- | |
|---|
| (a) 大前提: アメリカ政府は、 <input type="text" value="X"/> しようと思図する。 |
| (b) 小前提: アメリカ政府は、イラクと戦争をしなければ、 <input type="text" value="X"/> をもたらすことはできないと考える。 |
| (c) 結論: アメリカ政府は、イラクと戦争にとりかかる。 |

アメリカ政府のイラクとの戦争に対する「結論(c)」は、アメリカという共同体のなかで確立された価値的・実践的原理に深く関わる「大前提(a)」と、イラクの状況やイラクとの戦争についての科学的分析とそれを価値に置き換える倫理的分析から成る状況判断である「小前提(b)」とによって導出されるわけである。

このような実践的推論の組み立てから、「行為の論理構造の解明」を行うと、その目的論的説明は、結論(c)を既知として、「なぜアメリカ政府は、イラクとの戦争を行うのか」という問いを立て、小前提(状況判断)に影響を与える科学的分析を検討し、その説明である大前提

提を解明する、ということになる。

III 小単元の構成と内容知

2001年の所謂「9.11事件」は、ハンチントンの『文明の衝突』を想起させ、大きな衝撃を世界に与えたが、同時に、それは社会科に「子どもたちは、そうした現代社会をどのように読み解いたらいいのか」という課題を突きつけるものであった。そうした課題に対して、筆者は、先に「アメリカニズム」を取り上げて、これを事例として「愛国心」の構造を解明する教育内容⁸⁾、「イスラムに対する3つの誤解」を取り上げて「イスラム」の構造とその歴史的展開を解明する教育内容⁹⁾、を開発をした。これらを【表1】に位置づけると、前者は④、後者は①および②にあたる。本小論では、それらに続いて、③の教育内容の開発をめざし、アメリカの「外交」という行為の論理構造の展開を通時的に解明する。

(1) 小単元の構成

本小単元では、19世紀・20世紀(前半)・冷戦期(20世紀後半)・現代という4つの時代における、それぞれの「外交」という行為の論理構造を分析し、その歴史的な展開を解明する¹⁰⁾が、それぞれの時代に対応して、次のような3つのパートを設定する。

- | |
|----------------------------------|
| パートⅠ: 19世紀アメリカ外交とアメリカの「アイデンティティ」 |
| パートⅡ: 20世紀アメリカ外交とアメリカの「新しい使命」 |
| パートⅢ: 冷戦期アメリカ外交と現代ブッシュ外交 |

「外交」という行為を分析するに際して、それを、〈外交政策〉「国際主義(介入主義)か、孤立主義か」・〈外交要因〉「理想主義か、現実主義か」・〈外交手法〉「マルチラテラリズムか、ユニラテラリズムか」という3つの要素から捉えることができる。つまり、「外交」は、2つの〈外交要因〉によって導出された〈外交政策〉と〈外交手法〉の組合せとして具現しているわけである。本小単元では、これらの3要素を「アメリカ外交」を説明する枠組みとしたい。

また、国際政治の分析には、軍事力および経済力の要因、そして文化・情報を含めた価値、つまり力・富・価値の三局面から国際政治を考えるのが、E.H.カーの『危機の20年』以来の常道である。この3要因を先述の「外交」の定義づけと合わせて実践的推理の図式にあてはめると、2つの〈外交の要因〉のうちの理想主義(価値)が「大前提」、現実主義(力と富)が「小前提」(状況判断)、そしてそれらによって導かれた「外交政策」と〈外交手法〉との組合せとして具現したものが「結論」、と

いうふうになる。

19世紀・20世紀(前半)・冷戦期(20世紀後半)・現代の4つの時代(それら4つに、20世紀前半のアメリカ外交の前提として、19世紀末を加える)について、それらをまとめると、次の【表2】のようになる。授業は、基本的には、この実践的推論を「結論」→「小前提」(状況判断)→「大前提」というふうにならざるを得ない。しかし、学習者にとってそれぞれの時代にアメリカがど

んな外交を展開したかは既知ではない。そこで、実際の授業では、それぞれの時代について、[アメリカが直面した現実(力と富の問題)の把握]→[それに対応した(外交の方針)と(外交の手法)の推測]→[実際になされた外交における「現実主義」の検証]→[実際になされた外交における「理想主義」の発見(価値の問題)]→[その由来の追究]、というふう展開する。

【表2】アメリカ外交の転換点における「政策・手法」とその「要因」

		パートⅠ	パートⅡ		パートⅢ	
		19世紀	(19世紀末)	20世紀前半	冷戦期(20世紀後半)	現代
		モンロー	マッキンレー/T.ルーズベルト	ウィルソン	トルーマン	ブッシュ43
要 因	「大前提」 理想主義	「理想の社会」アメリカ (共和制か、君主制か)		アメリカの理想を世界へ (自由と自治の伝道)	一つの世界をめざして (自由か、圧制か)	アメリカの正義を世界へ (正義か、悪の枢軸か)
	「小前提」 現実主義	フロンティアが アメリカ化の場	フロンティアの消滅	新しいフロンティアを	二つの世界の存在	一極支配「帝国」
		西欧と隔絶した 弱小新興の大陸国家	帝国主義へ新規参入 大陸国家→海洋国家へ	世界国家へ	世界国家	唯一の超大国
政策・手法 「結論」		孤立主義 (ユニラテラル)	国際主義への転換	国際主義の正当化 マルチラテラル	孤立主義との完全訣別 マルチからユニへ	国際主義 ユニラテラル

(2) 小単元の内容知

各パートの学習内容は、19世紀・20世紀(前半)・冷戦期(20世紀後半)・現代の4つの時代に関する、以下のよう内容知に基づいている。

パートⅠでは、19世紀のアメリカ外交を扱う。19世紀初頭の「アメリカの現実」とは、ヨーロッパの強国と大西洋によって隔絶した弱小新興国であるということである。19世紀のアメリカ外交はこれに対応して展開する。すなわち、孤立主義と別称されるモンロー主義である。しかし、これには、もう一つ重要な含意がある。「共和制か、君主制か」というアメリカ的価値に対する「理想主義」の自負と意図が込められているのである。パートⅠでは、19世紀初頭の「アメリカの現実」を切り込み口として、19世紀アメリカ外交の大前提としての理想主義を解明し、その由来を「移民の国」アメリカの国民統合の方法という視点から捉える。

パートⅡでは、20世紀のアメリカの新外交を扱う。それへの転換は、19世紀末の「アメリカの現実」に由来している。すなわち、ヨーロッパとの距離感の縮減、アメリカという国家の成長とフロンティアの消滅である。こうした「現実」に対応して、アメリカは大陸国家から海洋国家への道を歩み始め、遅ればせながら帝国主義競争

に新規参入し、アメリカ外交は孤立主義から国際主義(介入主義)へと転換する。それを象徴するのが1900年の大統領選挙であった。しかし、アメリカという国家の成長には、アメリカの存立に関わる大きな問題があった。つまり、国家の成長によってフロンティアが消滅した結果、新来の移民たちのアメリカ化の場がなくなってしまったのである。その問題に解決を与えたのがウィルソン大統領である。ウィルソンは海外にフロンティアを求め、「自由と自治」のアメリカ的価値の伝道をアメリカの“新しい使命”と考えた。こうして、19世紀末の「アメリカの現実」は、ウィルソンによって理想主義に読み換えられ、国際主義が第一次世界大戦に勝利し世界国家へと成長したアメリカの20世紀の外交の基調となり、マルチラテラルな手法で進められていった。しかし、孤立主義と完全に訣別したわけではない。孤立主義への支持(国際連盟不参加)も依然根強く、20世紀前半は両者はせめぎあいの時代であったといえる。

パートⅢでは、20世紀後半の冷戦期と冷戦終結後の現代アメリカ外交を扱う。アメリカは「一つの世界」という理想を掲げて第二次世界大戦に参戦した。しかし、戦後の現実には「二つの世界」であった。この現実に対し、トルーマン大統領は「自由の生活様式か、圧制の生活様

式か」という理想主義を掲げて孤立主義と完全に訣別した。その後、1970年代の国際社会の多極化・ヴェトナム戦争の敗北という現実により、一時的にアメリカ外交はマルチラテラルな方向へ傾斜した。しかし、冷戦終結後、特に「9.11」以後は、アメリカ（ブッシュ43）は唯一の超大国として「正義か、悪(テロ)か」という新しい理想主義のスローガンを掲げ、ユニラテラルな外交を展開している。

以上、アメリカ外交の流れは、大きく、19世紀の「孤立主義の始まり」、20世紀前半の「マルチラテラルな国際主義への転換と孤立主義とのせめぎ合い」、20世紀後半の「マルチラテラルからユニラテラルへの傾斜」というふうに概観することができる。こうしたアメリカ外交の来歴を通観すると、アメリカ外交には一貫して理想主義の水脈が流れていることがわかる。それはアメリカの置かれた現実を理想主義で読み換えたものであり、そう

した読み換えは移民国家であるアメリカのアイデンティティに由来しているのである。

小単元の学習内容の背景となる内容知は、以下の文献より学んだ。

- ① 村田晃嗣『アメリカ外交—苦悩と希望—』講談社(講談社現代新書), 2005。
- ② 古矢旬『アメリカニズム—「普遍国家」のナショナリズム—』東京大学出版会, 2002。
- ③ 古矢旬『アメリカ 過去と現在④』岩波書店(岩波新書), 2004。
- ④ 西崎文子「アメリカ『国際主義』の系譜—ウィルソン外交の遺産—」『思想』No.945, 2003。
- ⑤ 西崎文子『アメリカ外交とは何か—歴史の中の自画像—』岩波書店(岩波新書), 2004。
- ⑥ 藤原帰一『デモクラシーの帝国—アメリカ・戦争・現代世界—』岩波書店(岩波新書), 2002。
- ⑦ 三浦俊章『ブッシュのアメリカ』岩波書店(岩波新書), 2003。
- ⑧ ジョセフ・ナイ(山岡洋一訳)『アメリカへの警告—21世紀国際政治のパワー・ゲーム—』日本経済新聞社, 2002。
- ⑨ 佐々木卓也編『戦後アメリカ外交史』有斐閣, 2002。
- ⑩ ジョセフ・ナイ(田中明彦・村田晃嗣訳)『国際紛争—理論と歴史—』有斐閣, 2003。
- ⑪ 斎藤真ほか監修『アメリカを知る事典』平凡社, 1986。

IV 小単元「アメリカ外交」授業試案

1. 小単元の目標

アメリカ外交の来歴をたどり、アメリカ外交の論理構造を解明するとともに、アメリカという国の特質について理解する。

2. 小単元の構成

- パートⅠ：19世紀アメリカ外交とアメリカの「アイデンティティ」
- パートⅡ：20世紀アメリカ外交とアメリカの「新しい使命」
- パートⅢ：冷戦期アメリカ外交と現代ブッシュ外交

3. 学習内容

- (1) 19世紀のアメリカ外交は「世界との関わりを可能な限り小さくしよう」とする(孤立主義)外交であり、それはワシントンに萌芽し、モンローによって打ち立てられた。
 - a. 新旧両大陸の相互不干渉を謳ったモンローの(孤立主義)は、「大西洋によってヨーロッパと隔絶した弱小の新興の“大陸国家”である」という、地理的・地政学的なアメリカの「現実」をふまえたものであるが、そこには、「ヨーロッパの君主制か、アメリカの共和制か」という捉え方で、アメリカの価値をヨーロッパから隔離・防衛しようとする「理想主義」的な自負と意図が含まれている。
 - b. 多様な人種・民族からなる「移民の国」アメリカは、言語・文化・歴史の共通性ではなく、民主主義や人権などの普遍的な価値への意思と合意によって国民を統合しようとする「理念の国」であり、それを実現することは神の使命であるとされた。モンロー主義に見られる「理想主義」は、そうしたアメリカのアイデンティティが反映している。
- (2) 20世紀のアメリカ外交は、アメリカの掲げる「理想」を規準に法律的・道徳的に世界情勢を判断して介入していこうとする国際主義がウィルソンによって表明され、世界に大きな影響を与えるに至った。
 - a. 国際主義外交への転換は、19世紀末からの帝国主義的世界的な流れ、アメリカの「大陸国家→海洋国家→世界国家」という国の力の伸長という「現実」に対応したものであった。
 - b. 普遍的な価値への意思と合意によって国民を統合しようとするアメリカにとって、「人間と制度のアメリカ化」の場であるフロンティアの消滅は重大で、それ故フロンティアを海外に求めることになり、「理想主義」に基づいた法律的・道徳的な介入がなされることになった。
- (3) 「一つの世界」をめざし孤立主義と完全に決別して第二次世界大戦に参戦したアメリカは、戦後の「二つの世界」という現実に対し、「自由か、圧制か」という善悪二元論的世界観に基づいて積極的介入を主張するトルーマン・ドクトリンが発表され、冷戦期のアメリカ外交の基調となった。
 - a. 1970年代、国際社会の多元化・ヴェトナム戦争の敗北という「現実」に対し、アメリカ外交は一時マルチラテラルな方向に傾いた。
 - b. 冷戦の終結後、唯一の超大国、相次ぐテロの脅威という「現実」に対し、アメリカは「正義か、悪の枢軸か」という新しい「理想主義」を掲げユニラテラルに外交を進めた。

4. 小単元の展開

【パートⅠ：「19世紀アメリカ外交とアメリカの“アイデンティティ”】

	発問	教授・学習活動	資料	生徒から引き出したい知識
小単元の導入	<p>Q 21世紀になってアメリカが関わった戦争には、どんなものがあるのだろうか。</p> <p>Q アメリカは、建国以来、どのくらい戦争をしているのだろうか。</p>	<p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、確認させる。</p> <p>P:確認する。</p> <p>T:説明する。</p>	①	<p>・イラク攻撃、アフガニスタン攻撃、…</p> <p>・(大統領によって始められた対外軍事行動の件数)</p> <p>・これらは、大統領の権限でなされる対外軍事行動で、議会の同意を必要とする憲法上の「戦争」は、米英戦争、米墨戦争、米西戦争、第一</p>

	<p>0 なぜ、アメリカはこのように多くの対外軍事行動を行ったのだろうか。アメリカ外交はどのような論理で進められて来たのだろうか。</p> <p>0 外交の論理とは、具体的にどういうことだろうか。</p> <p>・外交方針には、どんなものがあるだろう。</p> <p>・2つの外交方針のうち1つが選ばれた要因は何だろうか。</p> <p>0 選択された外交方針は、どのように実現されて行くのだろうか。その手法にはどんなものがあるか。</p> <p>0 アメリカ外交の方針、要因、手法についてアメリカ外交の展開を説明してごう。</p>	<p>T:学習課題を提起する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる P:考える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:説明する。</p> <p>T:学習課題を確認させる。 P:確認する。</p>	<p>次世界大戦、第二次世界大戦である。</p> <p>・外交方針。</p> <p>・世界との関わりを可能な限り小さくする「孤立主義」と、世界に可能な限り広く関わろうとする「国際主義」あるいは「介入主義」の2つがある。</p> <p>・…。</p> <p>・国際社会を国家の客観的な力のせめぎ合いの場ととらえる「現実主義」自らの理念に立って世界を眺め世界を改造して行こうとする「理想主義」の二つの立場がある。</p> <p>・…。</p> <p>・自国の態度決定を他国との協議を経ず単独で行う「ユニラテラリズム」と、他の国々との多面的交渉や国際機関を通して行う「マルチラテラリズム」の2つがある。</p> <p>・「孤立主義」-「国際主義（介入主義）」、「現実主義」-「理想主義」, 「ユニラテラリズム」-「マルチラテラリズム」。</p>
展開 1	<p>0 建国間もない頃のアメリカの「現実」とは何か。</p> <p>・建国間もないアメリカは、ヨーロッパ諸国から見ると、どんな国か。</p> <p>・そうした「現実」にある国は、どのような外交を展開するだろうか。</p> <p>0 この資料から、どのような外交方針が読み取ることができるか。</p> <p>0 こうした外交は、どんなやり方でなされただろうか。</p> <p>0 「モンロー・ドクトリン」から確認できるものは、「現実主義」だけだろうか。</p> <p>・「モンロー・ドクトリン」では、ヨーロッパの制度について、どのように言っているか。</p> <p>・それはどういう意味だろうか。</p> <p>・ヨーロッパの制度、アメリカの制度とは何だろうか。</p> <p>0 これらのことから、「モンロー・ドクトリン」の「孤立主義」について、どんなことがいえるか。</p>	<p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、予想させる。 P:考える。</p> <p>T:資料を提示し、説明する。 T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:資料を提示し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。</p>	<p>②</p> <p>②</p> <p>・大西洋の彼方の国、弱小新興国。</p> <p>・大西洋によってヨーロッパから空間的に隔絶した大陸の国・弱小の新興国が、アメリカの「現実」である。</p> <p>・弱小新興国は、介入するよりも、大西洋という空間的隔絶を利用した「孤立主義」外交を行う方が賢明である。</p> <p>・19世紀のアメリカ外交を決めた「モンロー・ドクトリン」である。</p> <p>・アメリカは「ヨーロッパ諸国の問題に干渉しない」、またヨーロッパからの「干渉を無関心に見守るということも不可能である」とある。</p> <p>・新旧両大陸の相互不干渉、これが「モンロー主義」と言われる「孤立主義」外交であり、ワシントンの「中立政策」を継承するものである。「モンロー主義」は、ヨーロッパと大西洋で空間的に隔絶した弱小新興国アメリカの地理的・地政学的「現実」を考慮して、アメリカの安全と利害を追求するものである。</p> <p>・大西洋という空間的隔絶の存在を利用して相互不干渉を主張しているわけだから、一方的な外交だったのではないか。</p> <p>・他国と協議する「マルチラテラリズム」ではなく、単独で行う「ユニラテラリズム」。</p> <p>・「われわれの平和と幸福を危うくせざるをえない」「南米の兄弟たちが…ヨーロッパの政治制度を採用するなどは誰にも信じられない」</p> <p>・アメリカの制度は、「ヨーロッパとは違うのだ、優れているのだ」という意味。</p> <p>・それには、自分たちの制度に対する自負心、それを南米に広めるのだという自信を読み取ることができる。</p> <p>・ヨーロッパの制度とは皇帝や国王による政治、アメリカの制度とは皇帝や国王を持たない共和政。</p> <p>・「モンロー・ドクトリン」から、「ヨーロッパの君主制」と「アメリカの共和制」という二分法的世界認識と、それに基づく自国優越の意識を読み取ることができる。</p> <p>・「孤立主義」は、「現実主義」に立つものであるが、そこには、二元的世界観に立つアメリカの自負心が見られる。</p>
展	<p>0 「孤立主義」に見られる自負心は何に由来するの</p>	<p>T:課題を提示し、考え</p>	

開 2	<p>だろうか。</p> <p>○ アメリカの共和国としての自負とは、具体的に何をさすのだろうか。</p> <p>・「被治者の同意による政府」や「民主主義や人権などの普遍的な価値」は、それほどまでに自負するようなものなのだろうか</p> <p>○ アメリカとは、どんな国なのだろうか。</p> <p>・そうした国は、どんな方法で国を一つにまとめることができるのだろうか。</p> <p>・アメリカはどちらだろうか。</p> <p>・そうした意思や合意によって形成されるアメリカという土地を、人々はどのよう受け止めていたのだろうか。</p> <p>○ 以上のことから、「モンロー・ドクトリン」に見られるアメリカの「自負」は、どのよに説明できるだろうか。</p>	<p>させる。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:説明する。 T:発問する。 P:答える。 T:資料を提示し、考えさせる。 P:考える。 T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p>	<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独立宣言の理念に基づいて合衆国憲法に規定された制度。 ・つまり、それは「被治者の同意による政府」ということであり民主主義や人権などの普遍的な価値を重視することである。 ・…。 ・アメリカ人が「なぜ、そう思うのか」を考えなければならない。 ・多様な人種・民族からなる移民の国、歴史の浅い国。 <p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国民を統合する方法として、(a) 言語や文化や歴史などの共通性によるもの、(b) 普遍的な価値への意思・合意によるもの、の2つが考えられる。 ・普遍的な価値への意思・合意によるのではないか。 ・歴史の浅い、移民の国であるアメリカは、言語や文化や歴史の共通性によって国をまとめることはできないので、普遍的な価値への意思・合意によって統合をはかろうとする「理念の国」である。 ・独立以前、初めて植民地に渡った人々は、アメリカを理想の社会「丘の上の町」を建設すべく神から与えられた「聖地」、その夢を実現することが、神が自分たちに与えられた「使命」であると考えていた。 ・「理念」によってアメリカを「聖地」と意味づけられ、アメリカは神の使命を受けた「特別な国」であると自己認識された。 ・それは、「理念の国」「特別な国」という理想主義的なアメリカの自己認識に由来するもので、「モンロー・ドクトン」は「被治者による同意」という「理念」を謳っていると捉えることができる。 ・「モンロー・ドクトリン」には、「理念の国」アメリカの「理想」が合意されているといえる。
終 結	<p>○ 19世紀アメリカ外交を決めた「モンロー・ドクトリン」について、整理してみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「介入主義か、孤立主義か」 ・「現実主義か、理想主義か」 ・「ユニラテラルか、マルチラテラルか」 	<p>T:指示して、まとめさせる。</p> <p>P:答える。 T:まとめ、確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・孤立主義、理想主義を合意した現実主義、ユニラテリズム。 ・19世紀のアメリカの外交は「孤立主義」で、それは自国の利益を追求する「現実主義」的外交で、ユニラテラルなやり方で展開された。また、この「孤立主義」外交には、アメリカのアイデンティティに深く関係する「理想主義」も合意されている。

【パートII：「20世紀アメリカ外交とアメリカの新しい“使命”】

導 入	<p>○ アメリカの「孤立主義」外交は、その後、どうなっただろうか。</p> <p>・19世紀末になると、アメリカの現実はどう変化しただろうか。</p> <p>・19世紀初めの「現実」とは、何だったか。</p> <p>・それらの「現実」はどう変化すると予想できるか。</p> <p>・そうした変化に対応して、アメリカ外交は、どう変化すると予想できるか。</p>	<p>T:学習課題を提示する P:学習課題を確認する T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:発問する。 P:答える。 T:予想させる。 P:予想する。</p> <p>T:予想させる。 P:予想する。</p>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・…。 ・ヨーロッパから空間的に隔絶したアメリカ大陸の弱小新興国。 ・運輸・通信の発達により、ヨーロッパとの距離感はなくなる。急速な産業化により、弱小新興国の国力も成長してくる…。 ・「介入主義」へと外交政策は転換したのではないか。
展 開 1	<p>○ 「現実」の変化と、それに対応した外交政策の変化を、確認していこう。</p> <p>・1900年の大統領選挙は、どのような対立だったか。</p> <p>・外交政策が争点となったこの選挙では、どちらが勝ったか。</p>	<p>T:資料を提示し、確認させる。 P:確認する。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・帝国主義政策を批判する民主党のブライアンに対し、米西戦争の英雄 T. ルーズベルトを副大統領候補に選び、積極的な対外政策を主張する共和党のマッキンレーが対立した。 ・マッキンレーが圧倒的な支持を得て勝った。 ・この路線は、副大統領から昇格した T. ルーズベルトに引き継がれることになる。

	<ul style="list-style-type: none"> この選挙戦からこのことからどういうことがいえるだろうか。 0 19世紀末の「現実」の変化は、ほかにないだろうか。 0 フロンティアの消滅という「現実」は、アメリカの外交にどんな影響を与えたのだろうか。 ・フロンティアとは、どんな所だったか。 0 フロンティアには、どんな意味があったのだろうか。 ・アメリカはどういう国だったか。 ・新来の移民には、初めからそのような自己認識とアメリカ人としてのアイデンティティがあったのだろうか。 ・どうして「アメリカ人になる」ことができたのだろうか。 0 フロンティアの消滅は、どんな問題を招来するだろうか。 	<p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問し、考えさせる P:考える。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:発問する。 P:答える。 T:説明する。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:資料を提示し、説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:答える。 T:説明する。</p>	<p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> マッキンレーの勝利は、アメリカ外交の「介入主義」へ転換を意味する。「介入主義」へ転換したアメリカは海軍力を増強(1916年海軍法)し、「大陸国家」から「海洋国家」へと進んでいく。 ・西部開拓が進み、19世紀末にはフロンティアが消滅している。 ・西部開拓の最前線で、新来の移民はこの地に入植して行った。 ・普遍的価値への意思・合意による共同体。 ・「理念の国」、「特別な国」と自己認識されていた。 ・非アメリカの世界からやって来た新来の移民たちには、初めから「アメリカ人である」わけではなく、そうした自国認識やアイデンティティがあるはずもない。 ③ ・新来の移民たちは、西部の開拓の最前線に入植し、そこでの生活と経験が、彼/彼女らをアメリカ化した。西部のフロンティアは「丘の上の町」を建設すべく神から与えられた「聖地」の役割を果たし、そこで新来の移民たちは「アメリカ人となる」ことができた。 ・新来の移民たちの「アメリカ化」が困難となる。 ・それは普遍的な価値への意思・合意によるアメリカの存立という問題に関わることであり、アメリカのアイデンティティという点において「大陸国家」には限界があった。
<p>展開 2</p>	<ul style="list-style-type: none"> 0 そのような「アメリカ化」の行き詰まりとアイデンティティの危機という「現実」に対して、どう対応しただろうか。 0 ウィルソンが「新たな使命」として「介入」とは、どんな「介入」だろうか。 ・これはどういう意味だろうか。 ・「モンロー大統領の原則」とは何か。 ・ウィルソンの「介入」とは、どんな「介入」だろうか。 0 ウィルソン大統領は、どんな「理想主義」の「介入主義」外交を展開しただろうか。 ・それらは、本当に「理想主義」といえるか ・第一次世界大戦は、「理想主義」外交といえるか。 ・「平和原則14ヵ条」は、「理想主義」外交といえるか。 	<p>T:予想させる。 P:予想する</p> <p>T:資料を提示し、確認させる。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問し、考えさせる P:考える。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:資料を提示し、確認させる。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p>	<p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> 「海洋国家」として、フロンティアに替わる場所を、海外に求めたのではないだろうか。 ・ウィルソン大統領は「海のむこうに新しいフロンティアをつくりだした」と述べている。 ・ウィルソンは、この演説に続けて、海外進出こそが新しいアメリカの「使命」であること、自由と自治の伝導はアメリカの価値意識に基づいて相手国の内地を判断しなされること、を述べている。 ・ウィルソンは「モンロー大統領の原則を世界の原則とする」と述べている。 ・「被治者による同意」「民主主義や人権という普遍的な価値」。 ・アメリカ的価値を世界に伝導するということ。 ・ウィルソンの「介入主義」は、アメリカ的価値を基準に法律家的・道徳的に世界情勢を判断して「介入」しようとするもので、「モンロー主義」に含意された「理想主義」の文脈に立つものである。 ⑤ ・第一次世界大戦への参戦、平和原則14ヵ条の発表。 ⑥ ・対独宣戦教書では、「民主主義、普遍的な正義のため」と参戦理由が述べられている。「平和原則14ヵ条」では、「民族自決」、「諸国家の連合組織の結成」などの原則が述べられている。 ・いえる。 ・いえるのではないか。 ・「民族自決」の原則は、「被治者の同意による政府」というアメリカ的価値に由来するものであり、「諸国家の連合組織の結成」の原則はマル

			チラテラルな外交手法による国際問題の解決をめざしたものと考えられる。
終結	<p>0 ウィルソン大統領によって踏み出された20世紀のアメリカ外交は、どのようにまとめることができるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「孤立主義か、介入主義か」 ・「現実主義か、理想主義か」 ・「ユニラテラルか、マルチラテラルか」 <p>0 ウィルソンの「介入主義」は受け継がれたのだろうか。</p>	<p>T:指示して、まとめさせる。</p> <p>P:まとめる。</p> <p>T:まとめ、確認させる。</p> <p>T:説明する。</p> <p>P:確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・介入主義、現実の変化が生み出した理想主義、マルチラリズム。 ・20世紀アメリカ外交は、19世紀末からの帝国主義の流れ・フロンティアの消滅というアメリカの「現実」の中で、「孤立主義」から「介入主義」外交へと舵が切られた。それは、アメリカの「理想」を規準に法律家的・道徳的に世界情勢を判断して行動するというかたちをとり、モンロー主義が含意していた「理想主義」の系譜に立つもので、「マルチラテラル」な手法によって進められていった。 ・第一次世界大戦はアメリカを「世界国家」と成長させたが、国際連盟への加盟は、孤立主義の原則に戻ろうとする上院の反対で実現しなかった。20世紀のアメリカ外交は、ウィルソン主義を基調として、「介入主義」と「孤立主義」の攻めぎ合いとして展開していった。

【パートⅢ：「冷戦期アメリカ外交と現代ブッシュ外交」】

導入	<p>●「孤立主義」と「介入主義」のせめぎあいはその後、どうなったのだろうか。</p> <p>0 その後の出来事で、アメリカ外交に大きな影響を与えると考えられる出来事として、どんな出来事があるだろうか。</p>	<p>T:学習課題を提示する</p> <p>P:確認する。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次世界大戦。
展開 1	<p>● 第二次世界大戦は、アメリカ外交にどんな影響を与えたのだろうか。</p> <p>0 アメリカはどのような論理で、第二次世界大戦に参戦したのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料では、どんなことが主張されているか。 <p>・アメリカの第二次世界大戦の外交を決めものは、「現実主義」だろうか、「理想主義」だろうか。</p> <p>0 第二次世界大戦によって、「一つの世界」は実現されたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦中～戦後、「一つの世界」をめざし、アメリカが主導し創設したものは何か。 <p>・その実現を妨げるものはなかったか。</p> <p>0 20世紀後半、アメリカ外交が直面した国際政治の「現実」は何だったか。</p>	<p>T:発問し、考えさせる。</p> <p>P:考える。</p> <p>T:資料を提示し、考えさせる。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問し考えさせる。</p> <p>P:考える。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「アメリカは指導力を発揮し」、「アメリカの価値を掲げて歴史を担い」、「第一のアメリカの世紀」を創造することが、アメリカに求められている。 ・「世界国家」アメリカの主導で、アメリカの価値を掲げる「一つの世界」を創ろうという考えで、アメリカは第二次世界大戦を戦った。 ・「理想主義」 ・第二次世界大戦の「介入主義」にはウィルソンの「理想主義」が継承されている。 ・ブレトンウッズ体制と国際連合。 ・ブレトンウッズ体制と国際連合は、「一つの世界」の夢を模索するものであった。 ・ソ連。 ・ソ連は、ブレトンウッズ体制にも参加せず、国際連合でも安保理理事会で拒否権を持った。 ・「二つの世界」という現実。
	<p>●「二つの世界」という現実の中、戦後アメリカ外交はどのように展開したのだろうか</p> <p>0 「孤立主義」は、本当に不可能な選択肢となったのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料で、トルーマン大統領は、アメリカの外交政策について、どのように述べてるか。 <p>・トルーマンの「介入主義」には、どのような世界認識が見られるか。</p>	<p>T:発問し、予想させる。</p> <p>P:予想する。</p> <p>T:資料を提示し、考えさせる。</p> <p>P:考える。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p> <p>T:説明する。</p>	<p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「孤立」はもはや現実には選択不可能な選択肢となる。 ・「…抵抗している自由な諸国民を援助することこそが、合衆国の政策でなければならないと信じる」と述べている。 ・「介入主義」外交が述べられている。この「介入主義」が、所謂「冷戦」を引き起こすことになる。 ・世界を「圧政」の生活様式と「自由」の生活様式の「二つの世界」にわけ二分法的な世界認識が見られる。 ・そしてそれは、自分の属する一方が「絶対善」で、他方が「絶対悪」とあるという善悪二元論的世界観でもある。

	<p>・こうした二分法的な世界認識について、思い当たるものはないか。</p> <p>0 冷戦時代のアメリカ外交の基調となった「トルーマン・ドクトリン」について、まとめてみよう。</p>	<p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:説明し、確認させる。 P:確認する。</p>	<p>・モンロー主義の「絶対王政のヨーロッパ」と「共和制のアメリカ」という二分法。</p> <p>・トルーマン・ドクトリンは、モンロー主義の「理想主義」を冷戦の文脈で捉え直したものであるとすることができる。</p> <p>・「二つの世界」という「現実」に対して、モンロー主義が含意していた「理想」を受け継いで、それを善悪二元論的世界観で捉え、ウィルソンの法律的・道徳的「介入」を進めていく「理想主義」外交である。</p>
<p>展開 2</p>	<p>0 その後、冷戦外交はどのように展開していきだろうか。</p> <p>・ずっと続いただろうか。</p> <p>・新たな「現実」とは何だろうか。</p> <p>・それは、アメリカ外交にどんな影響を与えただろうか。</p> <p>0 その後、「現実」の大きな変化は、なかったか。</p> <hr/> <p>0 冷戦終結後のアメリカ外交は、どうなっただろうか。</p> <p>・冷戦後のアメリカの「現実」とは何だろうか</p> <p>・それだけだろうか。</p> <p>0 こうした「現実」に対して、どうい外交が展開されただろうか。</p> <p>・こうした「介入」は、どのような論理で行われたのだろうか。</p> <p>・資料では、戦いの目的は何だとされているか。</p> <p>・それらからどのようなことがうかがえるか。</p> <p>・こうした外交について、思い当たるもことはないだろうか。</p> <p>・ブッシュの「介入」外交は、どんな手法で行われたか。</p> <p>・それは、ウィルソンの手法と同じだろう</p> <p>・これら以外に、ブッシュ外交のユニラテラリズムが確認できるものはあるか。</p> <p>0 ブッシュの「介入」外交は、どのように説明できるだろうか。</p> <p>・こうしたやり方はどんな問題を招来するだろうか。</p>	<p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。 T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、確認させる。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、考えさせる。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、説明する。 P:確認する。</p>	<p>・トルーマン・ドクトリンがその後のアメリカ外交の基本となった。</p> <p>・1970年代に至ると新たな「現実」が現れた。</p> <p>・…。</p> <p>・国際社会の多極化、ベトナム戦争の敗北。これらによりアメリカは「諸国のひとつ」となった。</p> <p>・「現実」をふまえて、「マルチラテラル」の手法による外交がニクソン・キッシンジャーによって展開された。</p> <p>・冷戦が終結し、ソ連・東欧の社会主義が崩壊した。</p> <p>・戦後のアメリカ外交が前提としていた「二つの世界」という「現実」が大きく変化した。</p> <hr/> <p>③</p> <p>・アメリカが唯一の突出した軍事超大国となったということ。</p> <p>・もう一つ、アメリカはテロの脅威に絶えずさらされる国であるということ。9.11事件はその累積の結果と見ることができる。</p> <p>・ブッシュ大統領は、ビンラディンが率いる国際テロ組織アルカイダをアフガニスタンがかくまっているとして、アフガニスタンを攻撃し、さらにイラクをテロ勢力の後ろ盾と断じてイラク戦争を起こした。</p> <p>・「自由のための恐怖と戦う」、「決して失敗することはない」、「イラク国民に自由を与えるため」などとブッシュは述べている。</p> <p>・「正義と悪の枢軸」の二分法的世界認識、神の認証に由来する自信、「自由の伝導者」という自己認識などがうかがえる。</p> <p>・モンロー、ウィルソン、トルーマンに見られた、「理想主義」外交の論理が確認できる。</p> <p>・国連や同盟国の懸念や反対を押し切って、自らの信じるままに先制攻撃がなされた。</p> <p>・国際協調を掲げマルチラテラルな手法をとったウィルソンとは異なり、ユニラテラリズムといえる。</p> <p>・京都議定書(温室効果ガスの排出規制)への調印拒否、ABM条約(弾道ミサイル迎撃システム制限条約)を遺物と断言、世界人種差別撤廃条約から脱退。</p> <p>・唯一の超大国、相次ぐテロの脅威という「現実」に対して、伝統的な「理想主義」を踏襲しつつ、大胆にユニラテラリズムを進める。</p> <p>④</p> <p>・アメリカの「理念」を掲げ、ユニラテラリズムに走れば走るほど、理念そのものへの反感が強まる。これが、現在の状況である。</p>
<p>終結</p>	<p>0 アメリカ外交の展開をモデル図にまとめてみよう。</p>	<p>T:モデル図を作らせる。 P:モデル図を作る。</p>	

<p>0 「現実主義、理想主義」の観点から、説明するとどうなるか。</p>	<p>T.説明させる。 P.説明する。</p>	<p>・「孤立主義－介入主義」軸、「ユニラテラリズム－マルチラテラリズム」軸に、①モンロー、②ウィルソン、③トルーマン、④ブッシュ43の各大統領を位置づける。</p> <p>・アメリカ外交は、「現実」を普遍的な価値の理念によって読み換える「理想主義」の水脈が、モンロー主義から現代ブッシュ外交まで一貫して通底している。アメリカの「理想主義」は、移民の国であるアメリカのアイデンティティに由来している。</p>
---------------------------------------	-----------------------------	--

5. 教授資料とその出典

- パートⅠ ①《アメリカの対外軍事行動》… 古矢旬『アメリカ 過去と現在の間』岩波新書、2004年、p. 87。
 ②《モンロー・ドクトリン》… 西崎文子『アメリカ外交とは何か－歴史の中の自画像－』岩波新書、2004年、pp. 29-30。
 ③《国民統合の二つのモデル》… 谷川稔『世界史リブレット35 国民国家とナショナリズム』山川出版、1999年、pp. 48-53より筆者作成。
 ④《理想の社会「丘の上の町」》… 前掲① pp.20-21。
- パートⅡ ①《1900年の選挙》… 前掲Ⅰ－② pp. 66-67。
 ②《アメリカの領土膨張》… 野村達朗『世界史リブレット32 大陸国家アメリカの展開』山川出版、1996年、p. 6。
 ③《フロンティアの役割》… 前掲Ⅰ－① pp. 20-21。
 ④《ウィルソンの「アメリカの理想」演説》… 古矢旬『アメリカニズム－「普通国家」のナショナリズム－』東京大学出版会、2003年、p. 23。
 ⑤《ウィルソンの「勝利なき平和」演説》… 前掲Ⅰ－② p. 86。
 ⑥《ウィルソンの「対独宣戦教書」／「平和原則14か条」》… 前掲Ⅰ－① pp. 24-25。
- パートⅢ ①《ヘンリー・ルースの「アメリカの世紀」》… 前掲Ⅰ－② pp. 113。
 ②《トルーマン・ドクトリン》… 前掲Ⅰ－② pp. 128-29。
 ③《ブッシュの「9.11」演説／「イラク戦争」演説》… 三浦俊章『ブッシュのアメリカ』岩波新書、2003年、p. 42／前掲Ⅰ－② p. 214。
 ④《反米感情の高まり》… 前掲Ⅰ－② pp. 221-22より筆者作成。

V おわりに

子どもたちが自己の置かれた「今－ここ」を読み解き説明できるようにすること、これが社会科の第一の責任である。そこから、子どもたちが自己のポジショナリティとアイデンティティを脱構築していくことが可能となる。本小論では、「子どもたちの自主的自立的思想形成を援助する」社会科歴史授業のバリエーションの一つとして、「行為の論理構造を解明する」歴史授業の教育内容を開発した。さらに他のバリエーションの教育内容開発に努めていきたい。

《註》

- 1) 二大目標の関係の捉え方としては、「一体・不可分である」という捉え方、「前者は後者の実現のための手段である」という捉え方、「前者が直接目標で、後者は方向目標」という捉え方が考えられる。
- 2) 森分孝治「市民的資質育成における社会科教育－合理的意思決定－」(社会系教科教育学会『社会系教科教育学会誌』第13号、2001)を参照されたい。
- 3) 何故(1)の社会科なのかについては、別稿で論じるつもりであり、ここでは、孔子のひそみに倣い「未だ生を知らずして、焉ぞ死を語らんや」とだけ述べておきたい。
- 4) 本小論で提示した小単元の授業は、2005年5月～6月に広島大学附属福山高等学校1年生の「現代社会」の国際政治の単元において1年生5クラスを対象に実施した。そのうちの1クラス1時間については、教育学部3年生に「教育実習B」で授業観察させた。
- 5) 森分孝治「地理歴史科教育の教科論」社会認識教育学会編『地理

- 歴史科教育』、学術図書出版、2000、p. 4。
- 6) これについて、「意思決定力を育成する歴史授業」(小原友行)や「批判的解釈学習(政策批判学習)」(児玉康弘)を想起する。「意思決定力を育成する歴史授業」は(2)の立場からのもので、筆者が拠って立つ(1)とは、立場を異にしている。また、「批判的解釈学習」は(1)の立場において同じであり、過去における行為としての「政策」の選択決定を分析するという点において、一応、表1の④に分類されよう。しかし、結論を先取りして言えば、「批判的解釈学習」は社会科の別の系のバリエーションである。「批判的解釈学習」は「歴史には別の可能性があったことを発見させる方法」(児玉康弘『中等歴史教育内容開発研究』、風間書房、2005、p.2)として案出された授業論であり、それ故、「政策」の選択決定の過程そのものを批判的に吟味する。現代社会を理解することよりも、現代社会の問題解決の主体者としての自覚を育てること志向している。
 - 7) G.H.フォン・ウリクト(丸山高司・木岡伸夫訳)『説明と理解』産業図書、1984。
 - 8) これについては、全国社会科教育学会2003年度研究大会で口頭発表し、拙稿「高等学校『世界史』の『主題を設定し追究する』学習(3)－『現代の世界』の場合－」(広島大学附属福山中・高等学校『中等教育研究紀要』45巻、2005)にまとめている。参照されたい。
 - 9) これについては、全国社会科教育学会2005年度研究大会で口頭発表したが、「現代世界を読み解く『世界史』の教育内容開発－『イスラム』の場合－」の題目で、近々論文化する予定である。
 - 10) 「外交」を通時的に解明する場合、いくつかの外交の潮流(参考文献①では、ジェファーソニアン、ハミルトニアン、ジャクソニアン、ウィルソニアンという4つのアメリカ外交の潮流が紹介されている)を歴史的にたどることが、まず考えられる。しかし、その時々々の外交は様々な潮流の離合集散の中で特徴が構成されたものであり、そこに交錯している潮流を授業において分析し子どもたちに理解させることはなかなか困難である。そこで、本小単元では、その時々々の外交のなかに見られる潮流ではなく、その時々々の外交の特徴を分析の対象とした。